

博士学位論文審査要旨

2009年1月24日

論文題目： イノベーションへのホリスティック・アプローチ
—スポーツが示唆するイノベーションの本質—

学位申請者： 松野 光範

審査委員：

主査： 経済学研究科 教授 八木 匡

副査： 総合政策科学研究科 教授 真山 達志

副査： スポーツ健康科学部 教授 横山 勝彦

要 旨：

本論文は、イノベーションを単に技術革新と捉えるのではなく、社会的価値および社会的ニーズを表出化し、社会との関係性まで含めた新しい価値創造と捉え、イノベーションをもたらす源泉と構造を明らかにすることを目的としている。

第1章ではイノベーションの捉え方を、既存文献を網羅することにより整理し、その中でイノベーション価値を社会的価値のレベルにおいて評価することを提唱している。

第2章では、イノベーションを支える知の体系を整理し、暗黙知を形式知に表出化することの重要性を主張し、社会的価値を反映したイノベーションをもたらす上でパットナムが提唱した「ソーシャル・キャピタル（社会関係資本）」が重要であることを明らかにした。

第3章では、ソーシャル・キャピタルを醸成し、社会的価値とニーズを反映したイノベーションをもたらした例としてサッカーのJリーグを取り上げ、Jリーグにおけるイノベーションがどのようなプロセスにおいて進められたかを詳細に議論している。そして、Jリーグにおけるイノベーションをサッカー以外のプロスポーツまで一般化して議論することにより、イノベーションをもたらす源泉と構造を明らかにする試みを行っている。

第4章では、スポーツ政策を含めた行政における政策立案において、社会的価値を表出化する手法としてCVM（仮想状況評価法）を提案し、具体的事例としてスポーツスタジアムに対する社会的価値の測定を試みている。そして、実際にスポーツスタジアムに行かない人も、地域にスポーツスタジアムを持つことに対して価値を見出しており、スポーツスタジアムは様々な社会的価値を生み出していることを示している。

第5章では、第4章までの議論を基礎に、イノベーションを評価する際に、単に効率性といった基準のみで考えるのではなく、社会的価値および倫理観、意欲を反映した基準が必要であると主張し、ホリスティック・アプローチが必要であることを結論づけている。

以上から、本論文は既存のイノベーションの概念を拡張し、真に豊かな社会構築のためのイノベーションをもたらすための要件を明確している点で、高い学術的価値があると評価できる。特に、社会的価値の表出化の手法を提唱し、それを反映したイノベーションプロセスを明らかにした点は重要な学術的貢献であると判断できる。これらの貢献は、技術革新の学術的發展に寄与するものであり、博士論文として高く評価できるものである。

もちろん、本論文が未解決な課題もいくつか存在している。その一つとして、ホリスティック・アプローチによるイノベーションに関して、更に独自性のある掘り下げた洞察を行い、より一般性の高い理論構築を行うことも必要と考えられる。また、Jリーグにおける成功が、他のプロスポーツの成功に結びついていない本質的要因に関する考察をより深く進めることも必要であり、

それがスポーツ政策の立案に対する含意をもたらすと考えられる。

これらの課題は、本研究の今後の発展の方向性を示すものであり、本論文の学術的価値を損なうものではない。以上を総合して、審査員一同は、本論文が博士（技術経営）（同志社大学）として十分値する研究水準をもつものと判断した。

総合試験結果の要旨

2009年1月24日

論文題目： イノベーションへのホリスティック・アプローチ
—スポーツが示唆するイノベーションの本質—

学位申請者： 松野 光範

審査委員：

主査： 経済学研究科 教授 八木 匡

副査： 総合政策科学研究科 教授 真山 達志

副査： スポーツ健康科学部 教授 横山 勝彦

要 旨：

論文提出者は、1月24日（土）に博遠館202号室で行われた試問会において、審査委員から数多くの質問がなされ、それに対する討論が行われた際、的確な回答をもって本論文の学術的価値を実証し、同時に技術経営や政策科学に対する十分な学識を持っていることを証明した。

また、提出された博士論文の中では英語論文が適切かつ正確に参照されており、必要な英語能力認定に際しても、十分な実力を有していることが明らかになった。

よって、総合試験の結果は合格であると認める。

博士學位論文要旨

論文題目： イノベーションへのホリスティック・アプローチ
—スポーツが示唆するイノベーションの本質—

氏名： 松野 光範

要旨：

かつて「Japan as No1.」と称されていた日本企業は、バブルの崩壊とともに輝きが薄れ、ようやく失われた10年といわれる停滞期を抜けることができた。その間にコストダウンという本音を隠すために、アメリカ型の成果主義の安易な導入、パートや派遣による安易なコストダウンなどにより、労使の信頼関係は揺らぐこととなった。

このような社会的・経済的背景の中で、1993年に誕生したJリーグは、スポーツ界における組織的なイノベーションとして評価されている。それは、単に新しいプロスポーツリーグが登場したのではなく、ホームタウン、百年構想、サポーター、下部組織などの新しい概念を導入し、これまでのプロ野球の組織とは大きく異なった理念を掲げ、情報開示などのアカウンタビリティなどにも配慮した組織運営を心がけたことによるもので、スポーツにおけるイノベーションと評価されている。この、Jリーグのイノベーションの過程については、競技力向上の目的を第一としながら、そのためには底辺である普及すなわち競技人口の拡大をする。その競技人口をベースにJリーグを発足させ市場を形成し、競技力を強化するという明確な戦略に基づくものである。このようなスポーツにおけるイノベーションを通してビジネスにおけるイノベーションを再検討することにより、閉塞状況にある社会に新たなイノベーションのパラダイムを試みることにした。

以下、第1章では、イノベーションが、技術革新と訳されたために、技術にかかわるものとの誤解について、シュンペーターが提唱した新結合の定義から振り返ることとした。その結果イノベーションについての研究は、これまで多くの研究者によりなされてきたが、分析的なアプローチから統合的なアプローチへ、そのウエイトが移っていることなどについて論ずる。さらに、技術イノベーションに成功した日亜化学と組織イノベーションを継続しているトヨタの事例について検討する。技術イノベーションについては、新たな知の発見や新たな技術開発だけでイノベーションが成立するのではなく、組織マネジメントが重要であり、特に暗黙知が大きな要素であると思われる。

さらに、イノベーションの光と影について格差の拡大や固定化という観点から検討する。さらに、リチャード・フロリダが提唱した、クリエイティブ・クラスという概念を紹介する。そして、日本初のイノベーションの国家戦略であるイノベーション25について、他の主要国と比較し、人材育成の重要性について論ずる。

第2章では、イノベーションを支える知の体系として、形式知と暗黙知について検討を行う。そして、経済のエンジンとなるイノベーションの生起のためには人の育成が重要である。さらに人の育成には時間がかかることなどから、イノベーションを育むための人を育てるライフスキル教育に早急に取り組みなければならないことについての問題提起を行う。

さらに、シリコンバレーを発展させたのは、ネットワークの構造がオープンでフラットであることなど組織や地域を支えるソーシャル・キャピタルであることについて言及する。ソーシャル・キャピタルについては、Jリーグを支えるボランティア組織のひとつであるコンサドーレ札幌のボランティア・スタッフに対する調査結果などを紹介する。

第3章ではスポーツにおけるイノベーションについて検討する。最初にJリーグにおけるイノベーションについての分析を行い、成功事例について検討する。抽象性の高い理念や価値観を共有することがスパイラルアップの要件であるとともに、競争と協調という対立的な概念を両立させたことが、Jリーグのイノベーションを促進させたと考えられる。単なるスポーツのビジネス化にとどまらず、市民と行政と企業が一体となった活動が社会的な存在価値を評価されたものと考えられる。このことは、企業の社会的責任なども社会的関係性のなかから構築されるべきことを示唆しており、イノベーションについても同様と考えられるのである。

第4章では、FIFAワールドカップ2002日韓大会のために建設された、世界標準のスタジアムについて、札幌ドームを対象に仮想的市場評価法による評価を試みた。その結果、札幌ドームの非利用価値の存在が明らかになり、利用価値と非利用価値の両方を合わせた価値評価を行った結果を中心に説明する。札幌ドームは設計家が芸術作品であることを主張するとともに、世界初のホヴァリングステージによるサッカーと野球の兼用スタジアムとなっている。いわば芸術的価値と技術的価値の融合物であり、その札幌ドームがスポーツにおけるイノベーションを促進させる装置として機能している。さらには、第2章で述べたサポーターやファン同士の相互作用、サポーター・ファンと選手との相互作用やクラブを支えるボランティアの活動など、さまざまなソーシャル・キャピタル形成のためのインキュベーターとして機能を果たしている。本章では、その後に追試した神戸ウイング・スタジアムの調査結果と併せて報告する。

第5章ではホリスティック・アプローチを、人と社会に幸福をもたらすためのイノベーションの包括的な価値体系の変更への試みと定義し、イノベーション・マネジメントについて検討する。イノベーションは効率性に加えて、倫理観や志や熱意・意欲などを反映した物差しが必要であると考えられるとともに、見えない価値と見える価値の合計が総体の価値であり、文化などの情緒的価値も繁栄された新たなパラダイムが必要であることについて論ずる。そのためには、近年注目されているホリスティック・アプローチが有効であり、またホリスティックな視点からの人づくりのイノベーションのレディネス強化が望まれる。

資源希少国である日本にとって、イノベーションが成長のエンジンであることについては異論のないところであろう。しかしながら、昨今はITを利用したマネーゲームに興じる輩があたかも成功者であるがごとくのふるまいをし、サブプライムローンの破綻によりいわゆる金融イノベーションが悪であるかのような印象さえうける。かつてのバブル期には日本的経営を礼賛し、バブルの崩壊とともにグローバリゼーションに、今回の経済危機では市場原理主義の否定など、その針は両極に大きく触れがちである。「道徳を忘れた経済は罪悪であり、経済を忘れた道徳は寝言である」とは二宮尊徳の言であるといわれているが、イノベーションのためのイノベーションあるいは、一攫千金的なイノベーションという発想から個人と社会にとっての厚生の実現のためのイノベーションというパラダイムシフトが求められているのである。

本稿では、スポーツというレンズを通し、イノベーションの基本となるのは、知を生み出し、知を加工する主体としての人々が重要であることがあきらかになった。ただし、その志は善をなすことにある。すなわち、倫理観や哲学に裏打ちされたクリエイティブな人達が、形式知と暗黙知の相互作用の過程を経るなどして、新たな発見や新たな組み合わせにより知の創造を行う。このような場としての環境を整備することが重要であることが明確になったのである。

限りある資源という制約条件のもとで人と社会に幸せをもたらすには、技術や効率的なイノベーションとともに、確固たる倫理や哲学などに裏打ちされたイノベーションへの俯瞰的なホリスティック・アプローチが有効であると考えられる。

以上